

## 教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立高岡工芸高等学校・教諭・井村 笑子
- 2 研修期間 2019年9月15日(日)～2019年9月23日(月) 9日間
- 3 調査研究課題 「ドイツ連邦共和国の学校教育における勤労観・職業観の育成に対する取り組みについて」
- 4 研修機関等 ドイツ：在デュッセルドルフ日本国総領事館  
ザンクト・ペーター小学校  
アルブレヒト・デューラー専門学校  
デュモン・リンデマン共同基幹学校  
デュッセルドルフ手工業会議所

### 5 研修の概要

#### (1) 在デュッセルドルフ日本国総領事館

儀正人総領事を表敬訪問し、ドイツ連邦共和国及びノルトライン＝ヴェストファーレン(NRW)州の社会情勢、教育事情全般についてレクチャーを受けた。ドイツでは、教育に関して州がその主権をもっている。近年は、移民の受入を背景に、ドイツ語が話せない子どもたちも多くみられるようになってきた。そのため、各教育機関ではドイツ語教育を行う必要性が生じ、ドイツの教育に広く影響を及ぼしている。

#### (2) ザンクト・ペーター小学校

市内の人口密接地域の一つであるフリードリヒシュタットに所在。全校生徒数は約 200 名、1 学年 2 クラスで 6 歳から 10 歳までの児童が在籍している。カトリック宗派学校であるが、他宗教の児童の受け入れもされており、特定の宗教行為の強制は行われていない。21 世紀を担う子どもたちのために、柔軟性やオープンマインドなどを育む教育を展開しているほか、自立学習を促すための取り組みやデジタル化に対応したプログラミング学習なども行っている。ドイツでは、小学校(グルンドシューレ)卒業と同時に、職業に就くことを前提とした学校に進学するか、大学に進学するかという進路選択が行われる。そのため、先の進路に対する具体的な取り組みについて伺ったところ、進路に関して 3 者面談などは行うが、方向性を示すような学校側の関与は特になく、子どもと保護者の意向で決定しているという回答を得た。子どもの進路に関して保護者の影響が大きいとはいえ、日本で言えば進路に関する 3 者面談は中学生になってから行うのが一般的であることを考えると、ドイツでは自分の将来について意識する時期が早いと感じた。

#### (3) アルブレヒト・デューラー専門学校

昨年設立され、NRW 州で最大の規模と設備を持つ職業専門学校。在籍生徒数は 4700 名で①職業訓練前の準備コース、②職業訓練、③職業訓練後の専門技能の習得の 3 段階の学習過程を設けている。一般教室のほかに、建築、家具、印刷、写真、メディア、飲食、歯科技工など様々な分野について学ぶことができる職業別の教室がある。アルブレヒト・デューラー専門学校の職人プログラムでは、週に 1 日は学校で職業に関する理論等について学び、残りの 3～4 日は事業所で職業訓練を受けるというデュアルシステムを採用している。職業訓練を行う事業所については生徒が自ら探し決定する。尚、公立であることから授業料は無償である。ここでは、ドイツの職業教育の基盤となるデュアルシステムの具体的な取り組みについてお話を伺うことができた。

#### (4) デュモン・リンデマン共同基幹学校

市中心地に位置する。生徒の 80%が移民家庭出身でその国籍は 20 カ国に上る。全校生徒数は約 530 名で 10 歳～16 歳の児童生徒が学ぶ。基幹学校(ハウプトシューレ)は、主に卒業後に就職、もしくは職業専門学校への入学を考えている児童生徒が通う学校である。そのため、デュモン・リンデマン共同基幹学校では、通常の授業の他に、職業訓練に関するカリキュラムが設けられている。その具体的な取り組み内容を以下に記す。

##### ・8 年生前期(13～14 歳)：「自分を知る」

自分の適正を知るために学校外部の機関で試験を受ける。内容は、筆記試験、コンピューターによる審査、実技。日本の適性検査に近いものであると感じたが、実技があるという点が大きく異なる。その査定結果をもとに教員との面談などを通して自己理解を図る。

- ・8年生(後期)：「どのような職業があるかを知る」  
あらかじめ希望調査を行った上で職業センターなどに赴き、職業体験を行う。期間は3日で、日ごとに違う職種の職業体験を行う。(例：1日目木工、2日目ソーシャル、3日目塗装など)
- ・9年生前期・後期：「職場で体験してみる」  
自分が興味のある事業所で、2週間の職業体験を前期・後期と2回実施。前期と後期に実習を行う事業所が異なってもよい。職業体験先は生徒が自ら探し依頼する。(実習先が見つからない生徒に対しては学校側のサポートがある)
- ・10年生：「進学か就職か、具体的な考えを出す」  
週に1日、希望する事業所へ赴き、1年間を通して職業体験を行い職業の焦点を絞る。(ここでも実習先は生徒が自ら探し依頼する)
- ・9年生・10年生：職業安定所の方から面接を受けることができる。
- ・この他に、8年生から自分の進路について考えたことや学んだこと、体験したことなどについて「BERUFSWAHL PASS」という記録ファイルに綴る。

デュモン・リンデマン共同基幹学校では外部機関との連携を図りながら、発達段階に応じた体系的なキャリア教育が行われていた。富山県でも14歳の挑戦や高校でのインターンシップ、企業等による体験講座などが実施されており、職業体験における取り組みは全国的に見ても充実しているといえる。本校でも2年生の全生徒を対象に3日間のインターンシップを実施しており、生徒は各自が所属する専門分野の事業所に赴き職業体験を行っている。しかし、事業所の選定については学校側が依頼した事業所の中から選ぶという形式をとっており、また3日間という限られた期間での体験であることから、どうしても主体的というよりはお客様の体験となる傾向が強く、課題であると感じていた。インターンシップでの体験を一層充実したものとするため、今後、取り組み内容や実施期間等の見直しを行っていく必要があると考える。また、日本の学校でもこれから導入が予定されている「キャリアパスポート」と同様の趣旨の記録ファイルについて内容や活用の仕方などを伺うことができ、大変参考になった。

#### (5)デュッセルドルフ手工業会議所

デュッセルドルフ手工業会議所は、デュッセルドルフ市とその近隣自治体を管轄とし、5万9千社余りの事業所が加盟している。原則、事業所を立ち上げようとする者は加盟が必須であり、事業主の利益につながるよう、コンサルティングやセミナー、財政支援や運用計画などについての各種相談や情報提供等の業務を行っている。また、職業訓練においても重要な役割を担っている。ドイツで職業に就くためには、職業訓練資格が重要な要件となっており、その総括を行っているのが手工業会議所である。職業訓練における手工業会議所の具体的な役割は、デュアルシステムに基づき、各事業所が行っている職業訓練が正しく実施されているかどうかを監督する、中間試験・修了試験を行い、訓練分野の知識や技能が備わっているかをチェックするなどがあげられる。

これらの視察先を訪れ、ドイツの職業教育について感じたことは、早い段階から将来を意識していなければ自己実現が難しい環境下にあるということである。しかし、そのために国、学校、企業が一体となって子どもたちのキャリア教育に取り組んでいた。学校では、外部機関と連絡しながら子どもたちの自己理解を促す教育に力を入れ、また、企業側は職業理解への場を惜しみなく提供し、技術指導を行う。職業訓練に関しては、受け入れ企業が抱えるデメリットも大きい。しかしながら、未来を担う人材を育成するという点に主眼をおいた教育がそこにはある。さらに、これらをサポートする国、州、市の支援体制も万全であり、ドイツの職業教育への取り組みから学ぶことは大きい。日本の教育は公平性が保たれているが、それ故の弊害もある。将来に対する意欲や意識の低下、何のために勉強するのかなど自分の将来像を描けない子どもたちが多くなってきた。日本には日本の教育制度の良さがあり、ドイツの教育実践をそのままあてはめることはできないが、子どもたちが明るい将来像を描けるような教育を実践するという目標に変わりはない。その目標実現のために、今後も自己研鑽を積み重ね、未来を担う子どもたちに出来ることは何かを日々模索し、挑戦し続ける教師でありたいと思う。

最後に、このような貴重な経験の場を与えてくださった富山県教育委員会並びに富山経済同友会の皆様に感謝申し上げます。